

令和 3 年 6 月 5 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K00352

研究課題名(和文) 日本および台湾現存明版書誌の研究

研究課題名(英文) Study of Bibliographies of Ming Books existing in Japan and Taiwan

研究代表者

井上 進 (Inoue, Susumu)

名古屋大学・人文学研究科・教授

研究者番号：40168448

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の開始以前、すでに蓄積されていた明版書誌は3000以上にのぼり、そのうちの比較的重要な書誌1300点については、基本的な整理をすでに終えていたのであるが、本研究ではこの既整理分に改めて検討、訂補を加えると同時に、調査によって新たに90点の書誌を収集し、また約180点の書誌を整理することで、すべて1500点近くの目録化を達成した。ただし最終年度の研究は、新型コロナウイルス感染症の世界的大流行に伴い停滞を余儀なくされ、このため目録の公刊につき出版社と具体的な交渉を行なうことはできなかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

歴史研究にとって不可欠の基礎は言うまでもなく史料であり、明代出版史ないし出版文化史研究の場合、その史料の基礎の最重要部分は具体的な明版書誌となるが、これまでの研究では、この具体的書誌の集積が極めて不十分であった。これは基本的かつ致命的な問題というべきで、その全面的解決には学界全体の長期にわたる努力が必要となるが、本研究は其中で先駆的な役割を果たそうとしたものであり、明版書誌の具体的な解明に向けて確かな一歩を記した。

研究成果の概要(英文)：Before beginning this study, I had already collected more than 3000 bibliographies of Ming books and finished organizing 1300 relatively important bibliographies among them. In this study, I reconsidered and revised the portion already organized. Furthermore, I collected 90 bibliographies through investigations and organized approximately 180 bibliographies. Consequently, I have achieved a catalogue of nearly 1500 bibliographies. However, the COVID-19 pandemic hindered the progress of this study in the last year, and I was unable to have productive discussions with a publishing company concerning the publication of the catalogue.

研究分野：中国近世文化史

キーワード：明版書誌 明代出版史 目録学 書誌学

1. 研究開始当初の背景

明版書誌の研究、さらには明代出版史ないし出版文化史の研究というのは、研究の蓄積があまり豊かでない分野と謂ってよかろう。というのも戦前までの目録学、版本学においては、宋元の古版や稀少な旧鈔本といった、文物的価値の高い善本こそがその関心の中心であって、明版書に対する関心は一般的には高くなく、とりわけ明代後半期の刊本になると、基本的には善本と見なされず、それらに対する版本学的研究も、ごくわずかしが行なわれてこなかったからである。

むろん戦前の研究でも、明末刊行の戯曲小説とか一部の版画書などには相当の関心が払われたが、それは善本の範囲が従前よりいくらか広がった、ということにすぎず、よって戯曲小説の刊行書肆については何ほどかの関心もたれても、それらの書肆がどのような営業活動をしていたのか、といったことはほとんど問題にされなかった。つまり戦前における明版書誌の研究はすこぶる初期的な状態に在り、出版史ないし出版文化史の研究に至っては、まだほとんど出現していなかったと言ってよい。

こうした明版書誌研究の貧困は、戦後も大きく変化することなく継続していたが、1970年代くらいになると、時の推移とともに明版書もだいに古版、善本として扱われることが多くなり、またヨーロッパにおける出版や読書の文化史研究からの刺激もあって、ようやくはっきりとした変化を見せはじめた。すなわちほぼ1980年代から、続々と大型の目録などが出版されるようになったのである。

具体的に言えば、まずは旧時の研究成果ながら1983年に至ってはじめて出版された傅增湘『蔵園羣書経眼録』(中華書局)、同年刊行の王重民『中国善本書提要』(上海古籍出版社)があり、さらに国立中央図書館『国立中央図書館善本序跋集録』(同館・現国家図書館、1992~94)、台北・国家図書館『国家図書館善本書志初稿』(同館、1996~2000)、沈津『美国哈仏大学燕京図書館中文善本書志』(上海辞書出版社、1999。同氏主編増補改訂版、広西師範大学出版社、2011)といった大型の知見目録も出現した。これらの目録は、そこに著録される多くの多くが明版書であることにより、明版書誌研究に対して大きな貢献をなしたものと言えるだろう。また中国で国家事業として編纂された『中国古籍善本書目』(同書編纂委員会編、上海古籍出版社、1985~96)も、それが大陸に現存する明版書のほとんどを網羅したものであることから、やはり明版書誌研究にとって有用な工具書となっている。

さらに2000年には南京大学に域外漢籍研究所が設立され、日本など外国に現存する漢籍に対する調査と研究にも本格的な関心が払われるようになり、2018年からは山東大学による全球漢籍合璧工程が開始され、日本蔵の漢籍に対しても実際の調査が国内各蔵書機関に委託され、現に進展しつつある。この企画が予期したとおりの成果をあげることができれば、わが国に所蔵される明版書についても、より正確な情報が中国、さらには他の諸国に伝えられることになるだろう。

しかしながら上に述べた既刊の目録は、中国人研究者が中国大陸、台湾、および米国の一部機関の蔵書を対象に行なった研究の成果なのであって、質、量ともにきわめて優れ、孤本の類もはなはだ多いわが国の現存明版書に関しては、まとまった研究がまったく存在していない。また南京大学の活動はというと、なお個別善本の紹介にとどまっているというのが実情だし、山東大学の企画にしてもまだ開始されたばかりで、その成果を評価する段階にはまったく至っていない。本研究はこうした現状を踏まえ、国際的にもきわめて重要な価値をもつ日本現存明版書誌を根幹としつつ、日本に蔵本がない重要書誌については台湾現存書によってこれを補い、そのうちのもっとも資料的価値の高い部分を公表し、明版書誌研究の水準を向上させるとともに、明代出版

史ないし出版文化史研究に対し、堅実な資料的基礎を提供しようとするものであった。

2. 研究の目的

上記のような背景のもとで、報告者はこの二十年あまり、一貫して明版書誌の収集、整理、目録化の作業に従事し、同時にその作業を通じて得られた史料を用いて明代出版史、ないし出版文化史の研究に務めてきた。その研究成果には『中国出版文化史』（名古屋大学出版会、2002）、『書林の眺望』（平凡社、2006）、また『明清学術変遷史』（平凡社、2011）の第一部があり、さらに台湾における書誌調査の成果を「台北所見明版書選録（一～四）」（『名古屋大学東洋史研究報告』38～41、2014～17）として発表した。この「選録」は、本研究における書誌の整理と公表がどのような形で行なわれるのかを、いわば試行版として具体的に示したものと言ってよい。

本研究はこうしたこれまでの研究に一応の総括をなそうとするもので、その目的はすでに述べたとおり「明版書誌研究の水準を向上させるとともに、明代出版史ないし出版文化史研究に対し、堅実な資料的基礎を提供」することに他ならない。このことをより具体的に言えば、まずはすでに蓄積されている明版書誌 3000 余点に就き、明代出版史ないし出版文化史、あるいは版本学の研究にとって高い資料的価値を有するものを選択し、その上に日本では見ることができないが、資料的価値が極めて高いと推定される台湾公蔵の善本書誌を積み増し、これを知見目録化する、ということである。

台湾公蔵善本の書誌調査については、単に書誌資料の充実をはかるというだけではなく、収集される書誌が散漫で系統性に乏しく、質的に偏ったものとならぬようにするため、どうしても必要であった。というのも、日本に伝わる明版書はその時代その時代に、格別内容を吟味することなく、いわば何でも手当たり次第に輸入されたものが自然に堆積し、また時間の推移とともに自然に減少していったものであるため、嘉靖以降の明代後半期刊本がほとんどであり、とりわけ万曆以降の明末刊本が圧倒的な比率を占めている。実のところこうした状況は、明代出版史研究にとって必ずしも不利益をもたらすわけではなく、むしろ独特のメリットを生じさせたのではある。つまり我が国に現存する大量の明版書には、本国ではまったく問題とされず、亡ぶに任せられた俗書や、清代以降正統から外れているとして顧みられなくなった著作などが数多く伝わり、結果として今や世界に類を見ない、無二の貴重な資料群を形成したからである。

しかしながら、正統的な観点からして価値の高い善本や古版は、中国からの書籍輸入量が激増した江戸初期、17 世紀よりすでに高価なものであり、日本にはあまり多く入らず、結果として正徳以前の明代前期刊本の書誌について言えば、日本現存書だけではその全体像をととも窺いえないこととなった。そこでこれを補う措置として、台湾公蔵善本の調査が必要となる。台湾の故宮博物院、および国家図書館に所蔵される明版書は、清朝の宮廷蔵書や清末より民国にかけての著名蔵書家の蔵書に由来するものであり、ちょうど日本現存明版書書誌の偏りを補ってくれるのである。

3. 研究の方法

本研究の基礎ないし根幹をなすのは書誌調査とその整理、知見目録化であるが、そこに何か特殊な方法論といったものは存在しない。つまりただ単に蔵書機関に赴き、マイクロフィルムや電子化された映像資料などではない明版書の実物を閲覧し、その書誌を記録し、ついで収集された書誌につき検討を加え、これを知見目録の形に著録する、というだけである。ただし国内蔵本の調査については、すでに相当量の蓄積があり、明代前期刊本の主要なものについては、その調査を大体のところ終えているため、本研究における国内調査は新しい書誌を収集するというより、

これまで収集した書誌を整理、著録するに際しての不審点、例えば版本の異同とか、序跋の文字の確認といったことのため、日帰りなど短期の調査を年に数回行なうにとどめることとした。

一方、台湾に赴いての調査は、やがて公刊されるべき知見目録の質を高め、明代における出版をできるだけ全面的に反映させるため、積極的に実施する必要があった。台湾には明初・中期の内府刊本や藩府本、あるいは弘治から嘉靖初年にかけて印行された活字本など、日本には存在しない明代前半期刊本が多く蔵されているが、それらの資料的価値は本研究にとってはなほ大きいからである。かくして当初の計画としては、研究期間の三年間、毎年二回は台北の故宮博物院と国家図書館に赴き、一回につき実質5日間の調査を行なうこととした。なお台湾における調査では、故宮博物院の場合一日五点程度、国家図書館では四点程度の閲覧となるのがふつうである。両者の数が異なるのは、閲覧時間および方法に相違があるためで、その結果5日の調査のうち、3日を故宮博物院に、2日を国家図書館に当てると、調査できる部数はだいたい二十部あまりといったところになる。

ついで得られた書誌の整理と著録であるが、ここでいう著録とは単に書名、巻数、撰者、版本等の基本書誌を記すだけでなく、必要に応じて主要な序跋や題識を節録、場合によっては全録するほか、版本系統や出版に至る経緯、あるいは刊行者についての考証、また当該伝本の構成、内容、特徴など、さらには刻工名や伝来や蔵印などについても記すもので、当然のことながらその作業量は極めて大きなものとなる。よって調査ノートに書きうつされた序跋等のパソコン入力といった書誌の初歩的整理作業については、アルバイトとして雇った東洋史専攻の大学院生ないし大学院研究生に担当してもらい、さらには目録の入力についても、まず目録稿を用意した上でその入力に従事してもらうこととした。

この外、これまでに蓄積されている書誌の検討や、新たな調査を通じて得られた知見を利用して論文や札記の執筆すること、またそうした活動を通じて台湾や韓国、中国大陸の研究者との交流もはかることも当然予定されていた。

4. 研究成果

すでに言及したとおり、報告者は本研究が開始される以前、すでに3000点以上の書誌を蓄積しており、そのうち比較的重要なもの1300点については、基本的な整理をすでに終えていた。本研究ではこれを基礎に、さらに新たな書誌を積み増すと同時に、この既整理分に改めて検討、訂補を加えつつ、引き続き収集された書誌の整理、著録を進め、目録の公刊に向けて出版社と具体的な交渉に入ることを予定していた。

この計画は、当初の二年間においては比較的順調に進み、2018年度には台湾公蔵明版書誌を新たに40点余り収集し、著録の方も70点ほどを加えることができたし、翌19年度にはやはり50点足らずの書誌を収集し、また80点足らずの著録を果たした。この時点で著録数は1500点に近づき、「明版書誌研究の水準を向上させるとともに、明代出版史ないし出版文化史研究に対し、堅実な資料的基礎を提供」という本研究の目的も果たすことができるかに思われた。

また当初の二年間においては、国際交流もすこぶる順調であった。台湾の故宮博物院・図書文献処および国家図書館・特蔵文献部のスタッフとは、これまでと同様良好な関係を維持でき、特に故宮の図書文献処からは、『故宮文物月刊』に論文を掲載するよう求められ、幸いこれに応えることができた。また韓国の成均館大学・東アジア漢文学研究所に招かれ、明代出版史に関する講演を行なったことも特筆すべき成果であった。この外、中国の南京大学・古典文献研究所からは、報告者の旧作を翻訳して該所が刊行する『古典文献研究』に掲載したい旨の申し出があり、これを受諾したが、その翻訳は訳者と緊密な連絡を取ったことにより、十分満足のいく水準に仕

上がった。

しかし2020年度になると、新型コロナウイルス感染症の世界的大流行によって状況は一変し、台湾における書誌調査は完全に不可能となったし、国内における調査も出張を行ないえない状況が続いたことで、停止状態に陥った。さらにこれまでは、アルバイトの院生等に資料の初歩的整理やデータの入力を担当してもらっていたが、これも学生の登校が制限される状況では停止せざるを得なくなった。こうして著録については、報告者が最初からすべて一人で行なうしかなくなったのであるが、オンライン講義等、今までにはなかった新たな校務負担が生じたため、その進行は緩慢なものとならざるを得ず、新たに著録を果たした書誌は20数点にとどまった。それでも論文や札記の発表は何とか継続しえたり、また中国の中華書局『文史』編集部より依頼され、目録学に関する論文の査読を引き受けたりはしたが、もっとも肝心の目録公刊に目途をつけることは無理となった。

なおこうした状況から、研究期間の延長も当然考えられたのであるが、研究代表者が20年度末をもって定年退官するという事情により、延長の手続きは行わず、本研究を一度終了させた後、改めて個人的な仕事としてのこりの目録原稿を仕上げ、その公刊をはかることとした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 井上進	4. 巻 45
2. 論文標題 『万暦野獲編』校記（二）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 名古屋大学東洋史研究報告	6. 最初と最後の頁 99 - 110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井上進	4. 巻 59・60合併号
2. 論文標題 旧書筆記十三	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 颯風	6. 最初と最後の頁 139 - 174
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井上進著 楊永政訳	4. 巻 22上
2. 論文標題 《千頃堂書目》与《明史芸文史》稿	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 古典文献研究	6. 最初と最後の頁 228 - 245
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井上進	4. 巻 44
2. 論文標題 『万暦野獲編』校記（一）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 名古屋大学東洋史研究報告	6. 最初と最後の頁 81 - 99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井上 進	4. 巻 430
2. 論文標題 巾箱本の雅与俗	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 故宮文物月刊	6. 最初と最後の頁 22-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井上 進	4. 巻 43
2. 論文標題 『万曆野獲編』の版本問題	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 名古屋大学東洋史研究報告	6. 最初と最後の頁 51-73
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 井上 進
2. 発表標題 明代における出版と学術の転換期
3. 学会等名 韓国・成均館大学東アジア漢文学研究所招待講演 (招待講演)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 井上進・酒井恵子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 平凡社	5. 総ページ数 464
3. 書名 明史選挙志 2	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------